文化財通信くまもと

第15号

平成10年３月

熊本県教育委員会
（文化課）

（熊本市釜尾古墳石室石屋形前壁装飾）

秦人忍米五斗

（はたのひとおしこめかごと）

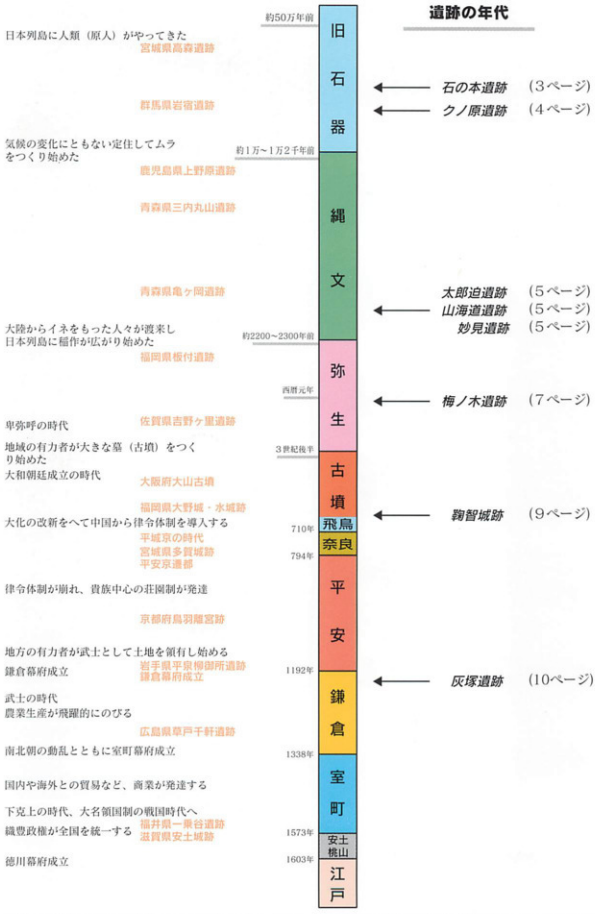
鞠智城跡貯水池出土木簡

はじめに

『文化財通信くまもと』第15号は、平成８年度から平成９年度にかけて熊本県文化課がおこなった埋蔵文化財発掘調査について調査のおこなわれた遺跡のあらましや特に大切な成果を取りまとめたものです。今後、本格的な報告書が刊行される予定ですが、それまでにはかなりの時間が必要です。今回の小冊子はその速報としてお使いください。なお、発掘調査は文化財保護法により、県土木部、県農政部の理解と協力により実施されました。今後とも文化財保護にご協力をお願いします。

今回は古代山城としては初めての木簡を出土した鞠智城跡も登場します。遺跡の年代や時代については２ページにまとめています。遺跡の記述は時代順にしており、また、内容をより分かりやすく知っていただくため、それぞれの遺跡の特徴を見出しにつけています。

また、遺跡の内容一覧と遺跡所在地図を最後に用意しました。ただ、遺跡地図は詳しいものではありません。遺跡を見学されたい方は地元の教育委員会か熊本県文化課までご連絡ください。それではゆっくりご覧ください。



※図上の各時代の時間幅は実際の長さとは比例はしていません。特に旧石器時代と縄文時代は紙面構成上かなり圧縮しました。

県下で初めて！
重なった3枚の石器群

熊本市　石の本遺跡

石の本遺跡は、熊本市平山町字石の本に所在する旧石器時代から中世にかけての複合遺跡です。平成11年開催の「くまもと未来国体」の主会場予定地にあたるため、平成6年度から調査がおこなわれてきました。平成9年度は主会場に近接する公園地区の範囲が調査対象となりました。

調査区全景（東より）

今回の調査で最も注目されるのは、旧石器時代の生活跡が**三つの層**（三つの異なる時期）から発見されたことです。三つの層のうち最も新しい時期の石器群は、約**24000**年前に降灰した**姶良Tn火山灰**（通称AT）と呼ばれる火山灰を含む層から出土しており、ものを切ったり、突いたりするための道具と考えられている**ナイフ形石器**や**台形石器**、それらを作るための道具である**敲石**（ハンマー）、作るときにできた剥片・砕片と呼ぶ石屑など約**3000**点の石器が出土しています。

このATを含んだ土層の下の**黒色層**からは、小型の**ナイフ形石器**や敲石・剥片・砕片など約200点が出土しています。

さらにその下の**明褐色層**からは、**局部磨製石斧・台形様石器**といった道具や敲石・剥片など約500点の石器が出土しています。

この局部磨製石斧は後期旧石器時代のなかでも、約**30000**年前後の古い時期に現れる特徴的な遺物で、石器の一部分を研磨するところからこの名がついています。動物の解体などに使っていたと考えられています。局部磨製石斧は、24000年のAT降灰前後の時期には姿を消し、約12000年ほど前に再び出現し、縄文時代草創期に隆盛するという傾向がうかがえます。

今回見つかった石斧は刃部のみならず、基部にも緻密な研磨を施し、縄文時代の石斧と良く似ています。

局部磨製石斧の出土状態

付近からは同様な石斧の刃部片も出土しており、使用の際に欠損した石斧もあったようです。もしかしたら**土掘り具**とか**木の伐採・加工**といった縄文時代の石斧と似た用途が考えられるのかもしれません。

この遺跡では、約2～3mの狭い範囲に石器が集中する**ブロック**という場所が遺跡のあちこちで見られました。このような石器の集中が見られる遺跡では、よく石器を製作した際にでる石屑や石を割るハンマーが多く出土します。石の本遺跡では、石屑やハンマーが出土するうえに、この石器同士が**互いに接合**するため、この場で石器製作のために次々と割られていたことが良く分かります。

石器の集中部分

またこの石器の集中区に近接して、**炭化物の集中部**も見つかりました。おそらく火を使った痕跡でしょう。中には、拳大程の石を集め、**炉**のように組まれたものもありました。

このように石器を作った所・火を焚いた所が同時に見つかったこと、さらにそうした生活の跡が同じ所で何度も営まれていたというのは、これまでの旧石器時代の調査ではあまり事例が無く、旧石器時代の人々の生活を考えていくうえで貴重な発見と言えるでしょう。さらに石器群が三つの層に分かれて出土したことから、使われた道具が時期によってどの

ように変化していったのかも判ってくるでしょう。

これまで熊本県下では、まとまった石器群が三つ層に明確に分かれて検出されたことは初めてで、後期旧石器時代の人間集団の生活の移り変わりを知る鍵になると思われます。

古墳時代の住居跡

旧石器時代の他にもおよそ**1500**年程前の**古墳時代**にも人々もここで生活をしていたことが判りました。平成８年度の発掘調査で５軒の当時の家屋の跡が発見されていますが、今年度さらに３軒見つかり、あわせると合計８軒になりました。

今年度見つかった３軒は調査区の東側に近接した状態で見つかりました。ここでは方形の穴を掘って、その中に柱を立て、屋根や壁を作る「**竪穴住居**」という家屋の種類でした。

竪穴住居を発掘していると時々、住居内の床や壁が赤く変色しているものに出くわす事があります。また所々に炭と化した木材が散乱していることもあります。それは家屋が燃えてしまった跡なのです。今でも火事にあった家屋に行くと、柱や梁（はり）などが燃え残っているのを見ることができますが、同じような光景を想像してみて下さい。

もっともなぜ燃えたのかについては、今まで住んでいた家屋から新しい場所に引越しする時に何らかの習慣として燃やしていった焼却処分など、色々な説があります。

石の本遺跡で発見された古墳時代の竪穴住居にも、こうした焼けた跡のある住居（**焼失住居**）が計２軒ありました。これらも引越しをした跡なのかもしれません。

当時の人々が使っていた雑器類も発見されました。大半が飲食料を貯えておくための**甕**や**壷**でしたが、供え物等をする時に使ったと思われる**高坏**や小さな壺も少し見つかっています。

このように小山山の東麓には、山の斜面上という一見住みにくそうな立地条件であっても懸命に生きていた旧石器時代から古墳時代の人々の足跡が、残されていたのです。

旧石器時代のキャンプ地の構造が判明！

球磨郡湯前町　クノ原遺跡

湯前町は球磨盆地の東端にある町ですが、九州山地を越えて宮崎へ向かう街道の宿場町として栄えたところです。町へは九州山地の裾野が緩やかに迫っていますが、その丘陵上を農道が建設されるようになりました。

ふるさと農道沿いの遺跡（南より）

調査区は道幅の細長いものですが、発掘調査によって**古墳時代**と**縄文時代早期**、それに**旧石器時代**の３つの時代が重なり合った遺跡であることがわかりました。３つの時代を明確に確認できたのは遺跡に降り積もった火山灰や火砕流でした。

１つは**アカホヤ**と呼ばれる火山灰で、鹿児島市のはるか南方、鬼界島の**6300**年前の大爆発により降り積もったものです。もう１つは錦江湾の**姶良カルデラ**を作った大爆発の**入戸火砕流**（ＡＴ）と呼ばれるもので、**24000**年前にこの球磨盆地をその**火砕流**が襲いました。今回の調査では、これらの堆積した層を基準としたのです。

古墳時代の遺跡は、**竪穴式住居**が３基と**土坑**が３基確認されました。いずれも30㎝ほどに堆積したアカホヤの中に掘り込んでありました。

縄文時代早期の遺跡は、遺構などは確認できませんでしたが、頁岩製のたくさんの石器や石材、それに土器が出土しました。いずれもアカホヤ下の**黒色土**の中より出土しました。

黒色土の下には２ｍもの厚さのＡＴ層が堆積しています。加久藤峠を越えて球磨盆地を襲った火砕流の凄じさを今に伝えるように、炭化した樹木

古墳時代の住居跡

環状のブロックを形成する旧石器群

や、一瞬に蒸発した草などの痕跡が見られます。そのＡＴ層の下には**２枚の粘土層**があり、特にその上面の層からはたくさんの旧石器が出土しました。多くは**黒曜石のナイフ形石器**とその石材で、火砕流が覆う直前の文化であることがわかります。

特に注目されるのは、その石器や石材の分布の仕方ですが、ちょうどドーナツのように、直径20ｍの円を描いていることです。これは**「環状ブロック」**と呼ばれるもので、もっと古い時代に特に関東地方に多く見られるものなのですが、２４０００年前という年代に**九州で発見されたのは初めてです**。

「環状ブロック」の意味についてはいろいろな説がありますが、今回の調査では、同じ面から炉や柱穴、溝状遺構などが見つかっており、当時の人々の生活を復元するのに、興味深い資料を提供するもの思われます。

１９９５（平成７）年度の調査（潮山遺跡）では３万年前の石器が出土しましたが、本遺跡の調査でも同じ時期にあたる層も確認されました。石器は数点しか出土していませんので、３万年前の本遺跡は潮山遺跡の周辺部にあたるもの考えられます。

縄文時代のムラを取り囲む土盛を確認！

熊本市　太郎迫遺跡

農村活性化住環境整備事業（熊本市寺迫地区）に伴う事前調査として３年目の最終年度の調査を終わりました。この間、コンテナ**1000箱**を越える遺物が出土していますが、遺跡としての規模も大きく、集落の構造がおおよそ判明しました。

調査区配置図

検出された遺構には**縄文時代後期～晩期**の住居跡約７基、埋甕約50基、土坑約200基、それに中央部が盛り上がっていると思われる遺物包含層(幅10～20m，中心部の深さ20～50cm）などがあります。

また、出土遺物としては縄文時代後期～晩期の各種土器（太郎迫式、三万田式、鳥井原式、御領式、天城式、古閑式）、打製・磨製石斧を始めとした各種石器。管玉を中心とした玉類。炭化した種子類などがあります。

これらの中で特に注目される成果として、遺物包含層の性格が判明したことです。Ａ～Ｊのいずれの調査地点からも先の包含層が土盛り状に発見されています。これらの包含層を地図上でみると、長径約200m、短径約170mの**楕円状**に点在していることがわかりました。

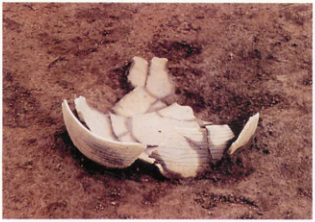
また、試掘調査の結果ではこの包含層の外側の遺構・遺物の密度は低くなることが確認されていますので、包含層が集落を囲むように存在することが予想されます。

このような包含層はおそらくムラ人によって意図的に造られた土盛りであり、ムラと外界とを区切る**境界**であったようです。このような意味からこの土盛を**土籬**（つちまがき）と呼んでいます。

土籬は、出土土器の型式が地点によって組み合

縄文時代の住居跡

妙見遺跡古墳時代の住居跡



妙見遺跡滋賀里式土器出土状況

山海道遺跡Ⅵ区検出の長方形土壙？

わないようです。また、土籬内には**埋甕**や**土坑**が群をなして分布しています。

今回の調査では住居跡の数は少ないものの、土籬の内側に広がっているようです。内部の今後の調査が期待されます。

遺跡の形成時期は太郎迫式土器が使用された時期の**縄文時代後期前半期**に始まるようですが、太郎迫式土器及びそれに続く三万田式土器の分布はかたよっており、この時期までは環状の集落形態にはなっていないようです。

ほぼ環状の形態になったはその後であり、おそらくその中心は**晩期初頭の天城式期**になるようです。古閑式期になると、また土器の分布は偏っており、土器そのものの量も少なくなります。

最後に、埋甕と土坑についてふれておきます。今回の調査では多数の埋甕と土坑が検出されました。

土坑は形、大きさにおいても埋甕のそれと違いはあるものの、分布範囲を同じくしていることは両者が同じ機能を持つものと考えることも可能です。

断定はさけなければなりませんが、今回発見した埋甕のなかで、**斜位**及び**横位**であるものがかなりあり、少なくともこれらは**甕棺**としての機能を想定できると思います。埋甕と分布範囲を同じくする土坑も**墓としての機能**があったと思います。

もし、墓とするならば、甕を用いるものと用いないものがあることをどのように評価するべきかが問題になってくるものと思われます。

同様の事業で、太郎迫遺跡と隣接する**妙見遺跡**、**山海道遺跡**も一部調査を行いました。

妙見遺跡は**縄文時代晩期**が主体の遺跡で、熊本県では珍しい**滋賀里式土器**が出土しています。近畿地方に見られる土器であり、当時の交流の広さがうかがい知れます。また、５世紀前半期の古墳時代の住居跡も２基確認されました。全体の様子はわかりませんが、古墳時代の集落が台地上に広がっていることがはっきりしました。

山海道遺跡は「文化財通信くまもと」第12号でも紹介しましたが、今回の調査区は遺跡の北西の端になると考えられます。今回の調査区の**Ⅵ区**からは住居跡の外側に**土壙**と考えれる遺構が複数発見されています。埋甕とともにその分布が注目されます。

土地にこだわる弥生人

菊池郡菊陽町　梅ノ木遺跡

梅ノ木遺跡は菊陽町津久礼の白川右岸に位置しています。このあたりは昔からたびたび洪水にみまわれ大きな被害を受けたところでもあります。現在では、あたり一面に田畑が広がっていますが、調査の結果、**弥生時代**と**平安時代**の人々がここに住まいをつくり、暮らしていたと思われる跡が見つかりました。その当時も、おそらく何年かに一度、あるいは何十年かに一度の割合で洪水におそわれていたことでしょう。

ところが、そのような場所にもかかわらず、これまでのところ**100軒を超える弥生時代**（中ごろ～終わり）の**竪穴住居跡**と10基の**甕棺・土壙墓**の跡が重なりあって見つかりました。（この数は今後の調査でまだまだ増えると思われます。）

遺跡全景（南より）

《　なぜこのような場所に人々は住み続けたのでしょうか？　》

それは、洪水をもたらす白川と深い関係があるようです。白川と弥生時代の人々との関わりについて見てみることにしましょう。

梅ノ木遺跡からは、弥生時代に使っていたと思われる土器や石器がたくさん見つかっています。その中には**石包丁**と呼ばれる、稲などの穂首を刈る道具や鉄製の**鍬**（くわ）や**鎌**も含まれています。

これらのことからこの遺跡の周辺では**稲作**などの作物の栽培が行われていた可能性が高く、水をひくのに都合のよい川のすぐそばで生活する必要があったのではないかと考えています。

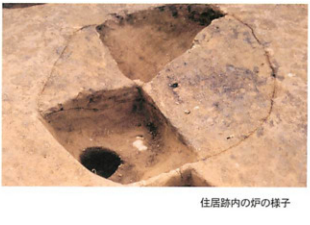
それを示すかのように白川の流域では、梅ノ木遺跡のほかにも下南部遺跡・新南部遺跡・神水遺跡・大江白川遺跡・白藤遺跡などでも弥生時代の遺跡が見つかっています。ただ、これらの遺跡では集落の様子がつかめるほど大規模に発掘されておらず、熊本県における弥生時代の人々の生活を知る上で梅ノ木遺跡は貴重な遺跡といえるでしょう。

《　当時の人々の暮らしぶりはどのようなものだったのでしょうか？　》

発掘調査中の竪穴住居の様子

復元された竪穴住居

まず、住まい（住居跡）ですが、地面に穴を掘くぼめその穴の床に柱を埋め込んで土台をつくり、その上に柔らかなかやなどを屋根にふいた建物と考えられています。穴の形は**方形・長方形**などで一辺が4～5m、深さは1mぐらいのものが多かったようです。屋根は、土台を支える4本の柱と補助的な役



住居跡内の炉の様子

割を持つ２本の柱とで支えられているものが多く、床のまんなか付近には**炉**があって、寒い冬でもここで暖をとって寒さをしのいでいたのでしょう。

さまざまな道具類

住まいをつくり、生活を営むためにはたくさんの道具が必要です。梅ノ木遺跡からは、これらの道具類もたくさん見つかっています。

地面に穴を掘ったり耕したりする鍬や鎌、木を伐採する**斧**、伐採した木の表面を削ったりこまかい作業をするための**鑿**（のみ）など、じつに多彩です。その中でも特に注目されるのは**鉄製の道具（鉄器）**です。これまでのところ７０点あまりが見つかっており、この時期のものとしてはかなり多い量といえます。

また、日常生活用品だけでなくお祭りの時などに使われると思われる**勾玉**（まがたま）や**管玉**（くだたま）などのアクセサリーも見つかっています。

《　人々はどのような場所に葬られたのでしょうか？　》

集落のまわりには、当時の人々のお墓がつくられています。遺体を納めるために**甕**（かめ）や**壷**（つぼ）がつかわれ、それが地中深くにうめられています。

甕（かめ）棺が埋められている様子

ただ、お墓の中でも集落の近くで見つかるものは少なく甕や壷は小形（高さ40㎝前後）のものにかぎられています。集落をとり囲むようにたくさん見つかるお墓では、中形～大形（高さ60～80㎝前後）のものが多くなっています。

現在では、開墾などで地面が削ずられていますが、弥生時代当時には**お墓のあった場所は集落があった場所よりも一段高くなっていた**と考えられ、永遠の眠りにつくのにふさわしい場所であったのでしょう。

作業風景

（発掘調査は共同作業です。弥生時代の人々もお互いに協力して住居やお墓をつくっていたのでしょうか？）

現地説明会の様子

（広く一般の方々に遺跡のことを知っていただくために開かれました）

全国で初めて！
古代山城から木簡

菊池市・鹿本郡菊鹿町　鞠智城跡

鞠智城の調査は今回で19次を数え、今までに数多くの発見がありました。本号では平成8・9年度の調査で発見された貴重な遺構・遺物を紹介します。

59号建物跡

鞠智城の中心部の長者原Ⅲ区から発見された、礎石の上に柱を立てた建物跡です。大きな石を土台として、その上に柱を建てる構造で、柱の部分に人に立ってもらいました。その大きさが理解していただけると思います。

建物の周辺から、**黒く焼け焦げた米**がたくさん出土することから、この建物は米を納めておく**高床式倉庫**であったことがわかりました。

さらに、建物の周りに溝をめぐらしており、その溝が南側で途切れています。おそらく建物の入口部分であったと思われます。建物の短辺（梁）の部分に入口があったということになります。

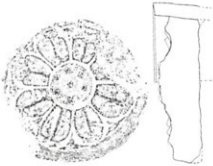
59号建物跡（西より）

軒丸瓦

長者原Ⅹ区から発見された礎石の**建物跡（64号）**も周りに溝がめぐらされていました。その溝の中から、軒先を飾る丸い瓦が出土しました。この瓦は**単弁八葉蓮華文軒丸瓦**とよばれるもので、中央に7個の蓮の実を表した蓮子が、そのまわりに8枚の蓮の花びらを表しています。

この文様は古代に**朝鮮半島**から日本に伝わったもので、非常にめずらしいものです。この瓦は高床式倉庫から出土していますが、数が非常に少なく、米倉の軒先を飾っていたかどうかは不明です。

さらに、この軒丸瓦は丸瓦に直接瓦当（丸い飾りの部分）を接合するという**特殊な技法**で作られています。この制作技法の軒丸瓦は、現在福岡県の**大宰府政庁跡**から出土しているだけで、他に例がありません。このことから、当時鞠智城が大宰府政庁と深い関わりをもっていたことがうかがわれます。



64号建物周溝出土の軒丸瓦実測図

池跡

平成8年度の**最大の発見**の一つに、池跡の発見があげられます。中心部北西側に谷が形成されていますが、その谷部に確認のためのトレンチ調査をおこなったところ、水成粘土の中に土器片が含まれており、その面積は約5300㎡にも広がることがわかりました。

池跡航空写真

池跡出土の木製品

朝鮮半島の古代の山城では、池跡の存在は確認されていますが、日本では鞠智城以外には確認されていません。

今回は池跡の中心部を調査しました。池跡の底には約3mの深さで粘土が堆積しており、その粘土層の中から、**7世紀後半**から**8世紀前半**の**土師器**や**須恵器**の他に、表紙で紹介した**木簡**を含め、**横槌**や**鋤**加工を施した**建築部材**など多種多様の木製品が出土しました。

写真は木製の**鋤**２個体分の出土状況です。まだほんの一部を調査したにすぎません。これからも発掘調査は継続して実施していく予定です。どんなものが池跡の底に眠っているか、とても楽しみです。

館の建物群を区画する見事な柵列発見！

球磨郡深田村　　灰塚遺跡

灰塚遺跡は球磨郡深田村字灰塚にあり、平成5年度から文化財調査を実施しました。

この灰塚遺跡は**古代～中世**（平安～鎌倉時代）にかけての**豪族の屋敷跡と縄文時代早期**（今から約6,000年～10,000年前）の**集落跡**が確認されました。これまでの調査結果は「文化財通信くまもと」で紹介してきましたので、今回はこの古代～中世の調査の結果をお知らせします。

これまでの調査は約10000㎡を6区画に分けて各年度毎の調査でしたが、今回の調査は古代～中世の最終調査区にあたり、豪族の屋敷跡の性格の全体を知る上で大切な調査でした。

調査の結果から主に次の３つが発見されています。

(1) **堀立柱建物**　　23棟
(2) **柵**　　10列
(3) **土壙**（どこう）　　61基

(1) の堀立柱建物とは地面に柱を立てるために穴を掘り、これを組み立てて建物をつくるものですが、この穴をピットと呼んでいますが、今回の調査区ではピットの底に直径30㎝位の平らな石が敷いてありました。これを**礎盤**（そばん）といいます。これは柱をしっかりと支えるもので、当時の建築の様子を知ることができました。灰塚遺跡にこれまでなかったとてもていねいな造りです。また、5間（けん）×6間（けん）総柱の3面庇（ひさし）〔約、縦10m・横13m〕という灰塚遺跡で**最大の堀立柱建**

調査区空中写真(深田村教委提供)

物が見つかりました。この建物の近くから、**銅製の仏具**が見つかりましたので、**宗教関係の施設**かもしれません。

(2) の柵ですが、10列の柵が見つかりました。柵の様子と建物の関係を見てみると建物と建物を区切るだけでなく、建物群と広場のような大きな区切りに使われたようです。すなわち、この柵で区切られた**建物群**には、**宗教関係**とか**政庁関係**とかのそれぞれの役割があったことがわかります。

(3) の土壙はお墓のことで、穴を掘り、底に白い砂をしいたものです。死者の寝床のようなものなのでしょうか。また、青磁（中国からの輸入品）の破片が供えられていました。現代の習慣にはない当時の**埋葬儀礼**を知ることができました。

「文化財通信くまもと12号」で紹介したように、『権』『湖州鏡』を始めとして、この灰塚遺跡の特長の一つは**銅製品**が多いことです。銅は再加工しやすいため、なかなか残りにくいのですが、たくさんの**宋銭**（中国宋代の銭）というお金が出土しました。興味深いことにそれらの宋銭は、堀立柱建物の柱穴の中から見つかりました。**建物を建てる際にお金を中に入れて建てたようです。**

また、遺跡のある小高い台地からは下球磨（しもぐま）と呼ばれる球磨盆地の東側を見渡すことができ、また、すぐ下には球磨川があることから、**領地を一望**し、また、**川を利用した交通に便利な場所**に屋敷を構えたのでしょう。

土壙墓（SK57）

灰塚遺跡の調査は中世武士屋敷全体の姿を考えることができる重要な調査でしたが、今回の調査区の周辺には「馬場」・「下屋敷」（しもやしき）・「買多田」（かいただ）など、屋敷に関係のありそうな地名もあり今後の調査も必要なようです。今の日本の文化は、この古代～中世に基礎的のものができあがったという研究者もいます。今後の報告書作成で当時の人々の社会や文化を復元できるようにしたいものです。

掲載遺跡調査内容一覧

No.	遺跡名	所在地	調査面積	事業名	調査期間	時代	調査者
10	石の本	熊本市平山町	6000㎡	国体関連主会場	H8,4-H9.3	旧・古墳	広田・中村
11	クノ原	球磨郡湯前町	4000㎡	ふるさと農道	H8,6-H9.3	江戸	山城
12	太郎迫	熊本市太郎迫町	4000㎡	農村住環境整備	H8,5-H9.3	縄文後・晩	古森・竹田
13	妙見	熊本市太郎迫町	2500㎡	農村住環境整備	H8,4-H8.10	縄文後晩・古墳	竹田
14	山海道	熊本市万楽寺町	1500㎡	農村住環境整備	H9,2-H9.3	縄文後晩	古森
15	梅ノ木	菊池郡菊陽町津久礼	2000㎡	国体関連道路	H8,4-H9.3	弥生中	亀田
16	鞠智城	菊池郡菊池町米原	500㎡	保存目的範囲確認	H8,4-H9.3	古代	西住
17	灰塚	球磨郡深田村	700㎡	畑地帯総合土地改良	H8,4-H9.3	中世	山下

文化財通信くまもと 第15号
平成10年3月31日　発行
発行　熊本県教育庁文化課
熊本県水前寺6丁目18番1号
☎096-383-1111（内線6716）
印刷　敷島印刷株式会社

08　教委　教文
③　009